

開かれた大学として、 SDGsの次まで見据える



国立大学法人筑波大学
大学執行役員／学長補佐室長

池田 潤 氏

SDGsを通じたグローバルな人材育成

筑波大学は、「開かれた大学」を建学の理念とする新構想大学として、1973年に創設されました。未来を構想しその実現に挑むフロントランナーと自らを位置付け、地球規模課題の解決と未来地球社会の創造に向けた知を創出するとともに、それを牽引するグローバル人材の育成に取り組んでいます。

本学がSDGsにかかわるようになったのは、自然の流れと言えます。環境面では、公害が大きな社会問題となっていた1977年に、環境科学研究科というおそらく日本初の環境系の名称を冠した大学院を設置しました。1983年には、グローバルな社会・開発・政治課題に取り組むために、国際関係学類を設置しました。こうした経緯もあり、2013年に採択された「ASEAN横断型グローバル課題挑戦的教育プログラム」の中で、SDGsにかかわる課題解決に貢献する人材を育成することを既に謳っていたのです。

本学がトップ型(タイプA)として採択された「スーパーグローバル大学創成支援事業」において開設した、「地球規模課題学位プログラム」では、SDGsの課題を、地球環境、リスク・安全、社会共生、人の健幸の4イシューとして整理しました。通常、研究はシーズベースで進みますが、本学位プログラムでは、SDGsのニーズから出発し、各分野の先生が関わる形で、文理融合で学べるプログラムを目指しています。

こうした取り組みの象徴的な成果として、2017年のグローバル・コンパクト(GC)への署名があげられます。これは、実は卒業生がきっかけで進んだ話なのです。国際関係学類の卒業生の中には国連職員もあり、彼らが学長に会いに来て、GCへの加入を進言しました。以前から行ってきた人材育成の成果として、ボトムアップから出てきて、それを学長が受け止めた。教育者としては、非常に嬉しいことです。

ダイバーシティの推進とトランスボーダーの連携

ダイバーシティの推進にも注力しています。一番の特徴は、ダイバーシティ・アクセシビリティ・キャリアセンター(通称DACセンター)を設置したことです。DACセンターでは、ダイバーシティだけではなく、障害学生支援、留学生も含めたキャリア支援を行っています。本学には、障害科学系という心身障害を専門とする教員組織があるため、開学当初から障がい者の研究・支援が進んでいたこともあり、障害学生の受け入れを積極的に進めていました。そのため、性別や国籍のみならず、障害学生、LGBT等の支援も含めて、DACセンターで取り組むこととしています。

例えば、視力が弱い方向けに字を大きく書いて、ふりがなをつけると、留学生やお年寄りにも読みやすくなる。障がい者の方が働きやすくなるように定時帰宅を設ければ、残業文化のない外国人にも働きやすくなる。個別の課題が様々な形で繋がってくるため、横断的な発想が重要です。

多様性には、研究と教育の質を高める力があると信じています。目が見えない、耳が聞こえないことで、それができる人にはない発想ができます。女性には男性にない発想、外国人には日本人にない発想ができます。差異をもつ人たちが単に働きやすい、幸せだけでなく、それをイノベーションやブレイクスルーに繋げていけるのです。

SDGsの次に向けて

筑波大学は、2019年9月に「筑波会議」を開催します。本会議の委員長を永田学長が務め、委員には東大総長、日本経団連会長、産業技術総合研究所理事長などが名を連ね、関係府省もオブザーバーとして参加します。会議の目標の一つに、若い人たちを主役にすることを据えています。考えるべきは彼らが主役となる20年後、30年後の将来なのです。そこで日本がリーダーシップを発揮できれば、大きなチャンスとなるでしょう。トランスボーダーの連携を通じて、是非多くの方々とSDGsの次を考えていきたいと思えます。